



緑

Bブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

青＋黄＝緑

草木は萌える

天から注ぐ雨に支えられ

草木は萌える

天から射す光に支えられ

草木は萌える

草木は萌える…

環境と問題と人間―辞書的読み方のススめ―

まずは「問題」という語について考えてみたい。この語は呼んで字のごとく「題を問う」ということである。あたり前、と思うかもしれない、しかし、ここに大切な意味が含まれている。それは「問う」ということである。つまり、問われなければ問題ではない。問われてこそ、さらに言えば「突きつけられ」てこそ始めてその問題は問題たり得るのである。

次に「環境」という言葉について考えよう。これは、いわば「外」ということである。「外」とは何か、それは「私でないもの」「私自身とはあまり関係ないもの」と言い換えても良い。それならば、「人間」とは何か、それは言うまでもなく「私」であり「私のあり方」のことである。

ここで読者の方には、もう一度タイトルを見てほしい、きっと「環境問題と人間」の間違いじやないかと思っていた人がいるのではないだろうか、むしろいて欲しい。実は「環境問題」という語についても述べたかったのである。

もう一度「問題」「環境」の意味に戻ってもらいたい。問題とは「突き付けられたもの」、環境とは「私でない」であった。

では環境「問題」のどこが、突き付けられているというのか。どう控えめに読んでも「私と関係ないところでのこと」にしか読めない。

私達はよく「今海は大変なんだなあ」とか「進みすぎた科学は問題だ」と口にする。それは誤りである。大変なのは海ではなく、問題なのは科学などの客観ではない。私たちのあり方が「大変」なのであり、「問題」なのである。

私達はもっと環境問題を「私」の範囲に取り込んでゆくべきだと思う。そういう意味で「環境」問題は、人間にあったのであって「人間」問題といった方が幾分もましであると思う。そうして初めて「問題」は私たちに突きつけられるのではないだろうか。

以上は私がふと思った何気ない言葉遊びであるが、このように「言葉」について考えてみるということで多少得るものがあるのではないだろうか。

緑の羽根

昔、募金をして緑の羽根をもらったことが何度かある。

この緑の羽根募金とは、戦争で荒れた日本の山に緑を回復させようと始められたものだ。昭和55年から協力を呼びかけ、毎年、主として春に募金運動を行っている。募金者に緑の羽根を渡している。（今は緑の募金と言われている。）

私はもらった羽根を最初は大切にしまっていたけれど、たいてい数日たつとなくなったり、存在を忘れてしまっていた。

ああこの羽根って自分の中にある緑を守ろうとする心につくりだなあ、とある日思った。募金をする時は地球環境に貢献しよう、緑を増やそうと思うけれど、何日かたつとどうでもよくなったり、忘れてしまったりする。

三日坊主ということばがあるように、やろうと考えたことに對して、継続してモチベーションを維持するのは大変だ。でも、何にしても大切なのは継続してやる事だと思った。

ふと床を見ると緑の羽根が落ちていた。まさかそういう事に気付かせるためにもこれを配っていたのか・・・なんて、考え過ぎだな。

▲例えは……縋って??▼

あの頃の僕には見えていた。そうあの色。なんて名前のいろだっけ。。

う……暑い。。

寝ぼけ眼で黒板の上の時計を見ると、針はさっきからちつとも動いていない。まだあと30分も……

教室の窓に映る見慣れた景色。僕は前から3枚目の窓が好きだ。

その窓には、たった1本の桜以外何も描かれていない。

ふう……

僕の耳がやっと働きました……いつものように先生の声をキャッチした。

「……だから葉は緑色なんです。もう一回言います、ここにある葉緑体が……」

まったく……これだから先生ってのは……

ん~~~~~~~~馬鹿な……なにを言っているんだ……

葉緑体?……あの桜の木は生きているから緑なんだ……

ん? 緑?……緑ってなんだ?

ただただ生きるってこと、それが緑っていみなんじやなかったっけ……?

君には見えているだろうか。

僕たちが生きるこの世界を、僕たちは全て理屈で表現し、理解することを最高の成果としている。

だけどよく考えてみると、自分の感情を揺り動かすものってのは理屈じゃなくて、それぞれの心にあるなにかなんだ。

愛情・嫌悪、その他いろんなものは、理屈じゃ理解できないから、人々を大きく動かしている。

「彼女を抱きしめたいのは、自分の脳のどこかが、ある電気信号をだすからだ」っていうことで、自分の気持ちを押えられはしないだろう。抱きしめたいのは好きだから。好きなのは……とそこで理屈での理解は行き詰る。

これからさき、きつと僕には理屈・数式などで物事を理解し尽くすことが求められていくだろう。

だけどそんな中で、理屈では理解できないと割り切って、感覚のみの世界に入り込むことも、もしかしたら一種の近道にもなるかもしれない。

だから僕はわすれたくない。

りんごが落ちた。ただそれは、地球が食べたかったただだよ……。

緑

——まさか生命（いのち）の尊
さをこの年で実感するとは——

少し暑くなりだした5月の午後。
指を近づけると、小さな手で一生懸命に握り返してくる。一日中寝てばかりいるのに、どうやらこの小さな手は反応するようだ。昨日は夜鳴きがすごかったからあまり寝ていなく、こっちまで眠たくなってきた。

「ああ、また赤ちゃんで遊んでる
ー。トシキは本当に親バカね。」

僕の奥さんのシズがやってきた。
「いいじゃないか。僕はただ天使
のようなこの子が本当に可愛いんだ
よ。この子はシズに似て絶対美人に
なるね。断言してもいいよ。」

本当にそう思っているから、僕は
重度の親バカだろう。

「飽きた。そうしたら早くお嫁
さんに行っちゃうかもよ？トシキも
そしたら泣くんじやない？それはい
いとして、早くこの子の名前を決め
なきやね。ヒロが決めたっていう
から私は待つてるのに……どうな
の？」

シズの言葉をなんとか堪えながら、
平静を装って僕は答えた。

「んー、やっと決まったよ。僕は
命名の才能があるかもね。『緑』って
いうのはどう？」

僕は起き上がって、シズの納得す
るような反応を待った。

「響きは普通だけど？まさか初恋
の相手の名前じゃないでしょう

ね？」

コイツというやつは……僕が今ま
でシズ以外の女性と付き合ったこと
がないのを知ってていつてやがる。

「違うって。これにはきちんとし
た理由があって……僕はシズには
『トシキ』って呼ばれてるけど、本
当は『俊廣（としひろ）』だろ。ちょ
っと昔のことになるけど、シズは僕
と初めてクラスが一緒になったとき
に僕の名前の漢字を間違って覚えて
たよね。『廣』の中身をきいろの『黄』
だと。まあそれがきっかけで、僕た
ちはよく話すようになったんだけど。
それで『シズ』の漢字は静御前の『静』
でしょ。」

「たとえが静御前って……」

「話の腰を折るなよ。とにかく、
僕の名前にはシズ的には『黄』の文
字が、シズには『青』の文字が入っ
てる。だからその2人の子供は『緑』
ってワケ。」

やっとシズは納得がいったらしい。
「へえー、トシキにしてはなかなか
か考えてるじゃん。いいよっ、それ
にしよう。私も気に入った。でも、
この子に自分の名前の由来をきかれ
たら、両親の馴れ初めを知ることにな
るわね。この子という反応する
かしら？」

「それはそれで面白そうじゃん。」
「ひよっとして、この子が赤木家
に嫁いだら、目も当てられない子が
生まれるのかしら？」

「つつっ？！」

それならば、ソイツを○せばいい
だけだ……

銀色の薄暗くて冷たいところでボクは生まれたんだ。

あ、だけどさみしくはなかったよ。仲のいい兄弟がたくさんいたから。

血がつながってるわけじゃないけど、生まれたときからずっと一緒に助け合って生きてきた兄弟って、そういうものでしょ？

けど、ある日気づいたんだ。こんな絆でも、すぐ壊れてしまっただってことに。

みんな泣いたけど、大きな黒いものに連れていかれた兄さんたちは、戻ってこなかった。

ボク達は小さく縮こまって、その黒いものから逃げようと温かい世界に閉じこもろうとした。

けど、やっぱり大きくて黒いものはまた、やってきたんだ。

次の瞬間、ボクは知らない世界にいた。下のほうで弟たちが手を伸ばしている。ボクも必死に手を伸ばしたけど、多分その時にはわかってたよ、その温かい世界には二度と戻れないってこと。

サヨナラ。

ボクはぎゅっと目をつぶって、体を縮こませた。

それから、どれくらい時間がたっただろう。ぱつと光がさしこんだ。

まぶしくって、思わず目を開けると、真白で、ビクビクしている画用紙が目の前に座っている。

あまりにこつちを怖がって、今にも泣き出しそうだから。ボクは思わず声をかけた。

「はじめまして。」

ボクの半分は優しさでもう半分は環境にいいセッケンで出来てるんだよ。きつとこれから仲良
くできるから、安心していいよ？

視界に大きく広がったのは、果てしなく続く青色と、その色のニオイを存分に吸い込んだ緑。

科学実験

ある日の午後、僕はある教授の研究室に呼び出された。おそらくテストのことだろう、相当ひどい点だったから。赤点、そして留年は間違いない。ところが予想に反して彼は笑顔だった。そしてこの実験に協力してくれたら単位をやろうと言いつ出した。彼の手には緑の液体の入ったコップが握られていた。簡単にいうと青汁。ぼくの周囲には頭の下さそうな大学院生が何人も集まってきた。そしてみな僕を見つめている。僕に断る勇気はともなかった。そしてその青汁らしき液体を飲んでしまった。すると教授たちの間から拍手が起こった。そしてしばらくしたらまた来るように言われた。

その後、僕はいつものように硬式テニスサークルで汗を流し、家に帰ったのだが、不思議なことに一向に腹がへらないのだ。それは次の朝も同じだった。のどが渴いたので、水は飲んだが、本当に何も食べなかった。これは一人暮らしだった僕には好都合で、食事による出費がなくなったのだ。あの緑の液体を飲んだからに違いない、僕はあの教授に少し感謝した。

再びあの研究室に行ったとき聞いた話だが、僕は彼らの作った人工葉緑体ジュースにより、光合成ができるようになったらしい。最先端の研究だった。おそらく世界中の誰もまだ手をつけていないかもしれない。飢餓や温暖化問題の特効薬となる可能性もある。ひよっとすると、人類生存の切り札となるかもしれない。それを聞いたとき、僕は正直驚いたが、同時に誇りにも思った。なんせ、ごく普通の人間だった僕が光合成人間第一号として永久に歴史に残る可能性があったから。「地球は青かった」で有名なガガーリンと同様に。テレビで放送されれば僕は有名人になるに違いない。そして僕は再びあの教授たちに感謝した。

しかしそううまくはいかなかった。しばらくすると妙な事が起こりはじめた。太陽にあたっていた顔・手・足が緑色になりだしたのである。当然だが、まるで葉っぱのようだった。そしてしまいには全身が緑色になってしまったのである。まるでカエルだった。

僕は人に見られるのが恥ずかしくなり、部屋のカーテンを締め切ってしまった。そしてそれ以来、一步も外に出ることはなかった。僕はしおれてしまった。日にあたらなかった植物と同じように。

実験は失敗に終わった。

受け継がれるもの

僕たちの小学校には変わったものがあるんだ。それは、田舎ならではの緑いっぱい、の学校の前の山に建てられた秘密基地。そこら辺の秘密基地とはわけが違う。ウッドハウス並みの頑丈でしっかりと、きれいな手作りの秘密基地。ずっと前に建てられたらしいんだけど、今でも十分秘密基地として使われている立派な秘密基地。僕たちのご自慢の秘密基地。そしてさらに特別なのが、校門のところのひっそりと置かれている蛍光ペン。この蛍光ペンには一定のルールが決められていて、緑色の蛍光ペンが置かれていた日には例の秘密基地で遊んでいいんだけど、赤色の時は基地で遊んじゃダメっていうルールなんだ。ある時赤色の時に行ってみた事があるんだけど、やっぱり誰も来ないし、さらには雨まで降ってきて最悪。行かないやよかったって後悔しちゃった。

そんな秘密基地、僕たちには当然の疑問が湧いてくる。それは『誰が蛍光ペンを置き換えているのか』という最大の謎。先生の誰かがやってるって言う子もいるし、山の地主さんや上級生って言う子もいる。中には山の神様がどうのこうの、とか言う子もいる始末。そんな疑問を解決するために、自分たちは色々やってみたりしたんだ。例えば友達を解決するために、自分たちはしたり、中でも頑張ったのは、ずっと校門を見張り続けたことかな。でも結局いい情報はないし、見張りの甲斐も無くて4日目ぐらいで早くも挫折しちゃったりで、その疑問は全然解決されないまま。せめて自分たちが秘密基地に行かなくなっちゃう中学校に入る前に、どうかこの謎は解いてみたいなあ。

そして秘密基地の謎を暴くことなく、十数年後の俺はここに居る。昔と変わらずこの母校の小学校に、当然今度は一教師として。結局俺は地元の中学校・高校・大学を出て、高校から考えていた『小学校の先生』にそのまま一直線。大学での教育実習を経て、なんとか小学校の先生になれたってわけ。そして、新任の学校として配属されたのがまさかの母校だった。そんな新任の俺に任せられたちょっとした雑務に重要事項が一つある。それは『校門の蛍光ペンの置き換え係』。まさしくあの謎の答え。あっさりと暴くことなく明かされた答え。最初は拍子抜けしたけど、この仕事は結構厳しい。まず子供に見られちゃいけないからキツイのなんのって。行動は慎重に。しかも、換える基準もしっかりある。例えば雨の日、たくさんさんの宿題が出る時期、その他もろもろ。これが結構を使う。そんな日々を送りながら、自分が受け持つクラスのこと当然しっかりとやらないといけないなんて……………。

今日の午後は天気が崩れて雨になりそうだから、赤色に換えなきゃ…………。見つかリませんように、っと。ってか、何で・何時からこんなことやリ始めたんだろ…………。やはり謎は残る…………か。

五月病

北海道から上京してまだ一ヶ月。都会での一人暮らしで心も体も疲れが溜まってる。なれない家事に手こずる。アパートの家賃を払うためにバイトに追われて時間が無い。

上京する前はもっと華やかな生活になると思ってたのに・・・。

木々が葉を落とす冬

この頃は受験勉強ばかりしてた

合格を目指して一心不乱に頑張っていた

気分転換に時折、東京での大学生活を夢見てアパートを探したり

桜が咲く春

合格の通知が来て大喜びした

直ぐに引越して家具もそろえ、バイトも始めた

新たに始まる大学生活に胸を躍らせていた

今は無気力感と焦りにを感じる。

桜上京する前は都内で暮らすことに憧れていたのになあ。

木々は夏に向けて緑の葉を付け始めている。

鮮やかで生命力を秘めている緑の葉だ。

僕が新緑の葉を付けるのはいつになるのだろうか・・・。

夏の思い出

僕が彼女と出会ったのは五月の初めの暑い日だった。一人でいることが好きだった僕は、小学校が終わると、一人で近くの裏山に出かけていくことが多かった。あの日もいつものように、裏山にあるお気に入りの丘の原っぱに寝転がって、一人でぼーっと雲を見ていた。

「何見てるの？」

驚いて顔を上げると、そこには真っ白のワンピースを着た色白のかわいらしい女の子が立っていた。緑一面の原っぱの中で真っ白の服を着た彼女は、とてもきれいな蝶のようだった。

「別に。雲を見てただけだよ。」

僕は急に恥ずかしくなって目をそらすと、彼女は、

「私も一緒に見ていい？」

と言って、僕の横にころんと寝転がった。

「別に、かまわないけど。」

これが僕と彼女の出会いだった。

それから毎日、僕らは原っぱで会って、二人で寝転がって雲を眺めながら、いろんな話をした。学校のこと、友達や先生のこと、裏山の花や虫のことなど、とにかく色々なことを日が暮れるまでずっと話をした。僕はすごく楽しかったし、彼女もとても楽しそうだった。僕は彼女の笑顔が大好きだった。僕はこれからもずっと彼女と毎日こんな風に過ごしていきたいなと思っていた。

でもそううまくはいかなかった。夏も終わりに近づいたある日、僕と彼女はいつもの雲を眺めながら話をして、だいぶ日も暮れてきた時だった。彼女は突然立ち上がると、「私、明日遠くに引っ越すんだ。だからこうして二人で会えるのは今日で最後なの。」と、ぽつりと言った。

「え？」

僕は最初、彼女の言ったことが理解できなかった。

「ごめんね、今までほんとに楽しかった。ありがとう。」

そういう残すと、彼女は僕を残して走って行ってしまった。ふと気づくと、あたりはすっかり暗くなっていた。次の日も、そのまた次の日も、僕は原っぱに行きたけれど、それきりもう彼女に会うことはなかった。

あれから十年。今でも初夏に白い蝶がひらひらと飛んでいるのを見ると、僕は彼女のことを思い出す。僕は彼女のことを好きだった。彼女は僕の初恋の人だった。

脱走

ガタガタガタ：

——ここまで来ればもう見つけれられることはないな。もうあんなところに閉じ込められているのなんてまっぴらだ！

——もう囚われの身なんかじゃない、これからは自由なんだ！

——やっと、あの「鳥かご」とかいふ監獄から抜け出せることができた
それだけでも心が弾む。

——食べ物はずい、ていうか好きな時に好きなだけ食べさせてくれよな。鳥を飼うのなんて人間のエゴだよ：

それにしても久しぶりに見る外の世界はとても眩しい。行く先は「脱獄」する前から決めてあった。それは、私が心を落ち着けることのできる、緑があつて本来の自分で自由に暮らすことのできる、「あの森」。

二時間後。

——えっ、何で？ 何で「あの森」がないの？ 昔に何度かそこに行ったことがあつたから場所はあつているはずなんだけど：

空から見える緑色のものと言へば、濃い緑の「あの森」ではなく、元気のなさそうな薄い緑の芝生のゴルフ場だけ。森の中から虫とかがたくさんいて生きられそうだけど、あんな芝生じゃ何もいないし生きていけないなあ。それでも間違いなくこの場所に「あの森」はあつたはずだ。疑問に思つて少しあたりを飛び回ってみると、「自然の森の緑がさわやかな、新ゴルフ場ついにオープン！」という幕が掲げられている。

——やっぱりこのゴルフ場なんだ：

——はあ…、それにしても「自然の森の緑がさわやかな」だなんて、まったく誰が考えたんだろう…人間のエゴもいいところだ。どうしてこんなわけの分かんないことをやるんだろう、人間って。ほんと、バカだよな。

仕方ない。「あの森」がないのなら監獄、嫌だけど「鳥かご」に戻るか：
もう、人間なんていなくなればいいのに：

コト

私の家の近くには小高い丘がある。私の小さい頃から変わらずに、木が一本だけそこにあった。コトの木と呼ばれている。私はそこがお気に入り、で時間を見つけてはその木陰でのんびりしたり、考え事をしたりして時間を過ごす。

だいぶ暖かくなってきた春の日に私はコトの木の下のいた。春の柔らかな風は私の頬をくすぐっていく。芽吹き始めた新芽はまだ小さく、ただやさしい風に包まれていた。「今年もよろしく。」

自然とそんな言葉をかけていた。

晴れ渡った夏の日に、私はやっぱりコトの木陰にいた。時折、風が頬を撫でる。この季節の風は涼しくて、清々しくて、心地よい。木の葉もつられてサラサラと揺れる。気づけば、木の葉の音色に耳を澄ませていた。何故だろう、同じ音のはずなのにいつも違う音みたいに聞こえる。今度は鳥が一匹飛んできて、パサッと中に入っていく。どこかコトの木が彼を迎え入れている声のように思えた。

まだまだ夏はこれからで、毎日暑い日が続いている。私はいつもの場所で涼んでいた。木に寄り掛かって、上を眺める。キラキラとした木漏れ日の中にぼつぼつと花を咲かせていた。そのまま、ウトウトとしているうちに眠りに落ちてしまった。

何かの鳴き声に目を覚ます。視線を下に向けると私の膝で猫が一匹眠っていた。起こしてしまわないように注意しながら、腕を伸ばす。遙か遠くに見える世界は茜色に染まっていた。もう一度鳴き声が聞こえて、再び猫に視線を戻す。昼寝はもう終わったのか、すたすたとどこかに歩いて行ってしまった。そんな気ままな猫の姿に自然と笑みがこぼれてくる。そんなときでも、コトの木はサヤサヤと揺れていた。

それから身回りの事が忙しくなってしまうと、次にコトの木の下の来た時にはもう秋になっていた。いつかの日に見た花はすでに木の実へと姿を変えている。コトの実って食べられるんだっけとか考えていると、そのうちの一個が私の手元に落ちてきた。恐る恐る一口かじってみる。少し酸っぱいけど、甘い香りが口いっぱいに広がる。あ、そういうえば、去年も食べたなあとかのんびりと思い出した。

紅葉し始めた木の葉はサワサワと少し誇らしげにでも、淋しそうに揺れていた。

次に丘に登った時には、完全に赤く染まっていて、丘を埋め尽くすように木の葉が舞っていた。私が歩きたびに絨毯のように敷き詰められた木の葉がカサカサと音を立てる。その音を聞くと、コトの木は変わらぬにそこにあるにもかかわらず、春になるまでもう会えないんだなあと思ってしまう。

家に帰ってコート脱ぐとくっついていた木の葉がはらりと舞った。私にとってそれは、コトの木から送られた大切なもので、写真立てにそとはさんだ。

季節は流れて、新しい春が来る。私は久しぶりにコトの木の丘に登った。もう枝には新緑が宿っている。

今年もまた、新しい言の葉が…。

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	みどり	1 pt	9 位	7 sp
		うーん、楽屋落ちコード、ぎりぎりか。ごめんなさい気分は伝わってきました。 当然「出直し」があるものと期待。 それにしても特別賞の嵐でしたね。7 賞ゲット。しかし、ポジティブな推薦理由は金賞のみ?? イチオシフレーズを並べたら、作品のほとんどがカバーされちゃう、というのも珍事ではありました。 特別賞：もう少しがんばりま賞/がんばりま賞/ねらっちゃダメで賞/出直してきま賞/金（緑なのに）賞（授賞理由：ガンバッタ感じがでてる!! かなり考えたと思う）/やる気ないで賞/力量不足で賞 イチオシフレーズ：「みんなごめんなさい」× 2 「思いつきません」「力量不足です、出直してきます」		
A02	河川敷にて	12 pt	4 位	2 sp
		なつかしの逆上がり。父の視点から伸びゆく息子を見ているところが新鮮です。「俺はその背中を押してやるだけでいい」というフレーズにしっかり気持ちが乗っていました。 いいパパになりますように。 特別賞：父になりきってるで賞/ヘタレ賞（父親のへたれっぷりがいい）		
A03	ミドリ	16 pt	3 位	1 sp
		タイトルのとってつけた感に、まず笑えて。みなさま、タイトルはお忘れなく。 フリーター君が、ほんのりしあわせになるストーリー。コイツへの愛情がしっかり伝わって、でも妄想全開でハッピーエンドに行くのではなくて。 そんなほんのりさ加減が、ほどよい読みごちでした。枯れ行く彼女の姿が、ちょっと点描されると、なお良かったのでは。 特別賞：こんな恋愛もアリで賞		
A04	ASUPARA	0 pt	10 位	0 sp
		あざやかな色。おいしそうな色。飾り気なくさらりと書かれていて好感を持って読めます。テーブルの色分けのあたり、実体験らしさを感じさせます。 できれば、食べ物のお話なので、色だけでなく味の描写も欲しかった。それと、おじいさんがアスバラ作りをやめたわけも。		
A05	エメラルド	21 pt	2 位	0 sp
		翡翠（ひすい）と翡翠（かわせみ）、おんなじ字なんですね、ふむ。 緑尽くしのラヴ・ストーリー。小学生かと言いたくなるオクテの恋の告白をほほえましいと支持したAブロックのみなさまは、まだまだケガレなき心の持ち主です、きっと。そんなリトマス試験紙的作品（え?）。 えーと、マジメにコメントすると、上京期間がジャマな感じがします。田舎からいきなりパリへ、のほうで別れがドラマティックだったのでは? そして、だいじな恋の告白すらできないアキラ君の産みの親が、こんなに自己アピール上手な作者さんだったことにびっくり。 イチオシフレーズ：「あのさ、ずっと決心つかないでいたけど」		
A06	グリーンピースの悪夢	5 pt	5 位	1 sp
		まさに悪夢ですね。献立がリアルなところ、実話と推定。実感をもって読めました。 クライマックスシーンのあたり、できごとを羅列しているだけで単調か。 語尾が「——た」「——た」と続くと単調で小学生作文っぽくみえてしまうので、そのあたり変化を付ける工夫をすると、ぐっと 文章年齢 がアップします。おためしあれ。 特別賞：これは何で賞（授賞理由：これを読まなかったらいいてたかもしれないから。作者さんありがとう）		

A07	緑の館	4 pt	7 位	1 sp
		元戦士（？）の思索。今の世界と重ね合わせながら、少しファンタジックに味つけ。「死ぬより生きる方が難しい」というフレーズがずっと入ってきました。 狙いは悪くないと思うのですが、せっかく架空の世界を作り出したのですから、もっと彼の個人史を見せて語りたかった。 特別賞：もっと言いたいことがあったんで賞 イチオシフレーズ：知恵ある獣		
A08	アパート18階のしだれ柳	0 pt	10 位	0 sp
		柳の下にはお化けがいるぞ！ と思うのは私たち日本人。 でも、これは留学生さんの作品で、柳のけなげさに、また走り出せる気持ちが宿ります。無理ない展開で、サンキュー柳ちゃんへ。「希望は死ぬ」なんて、留学生さんだからこそできるユニーク表現ですよ。 イチオシフレーズ：「死じゃった」「希望は死じゃった」		
A09	未来の緑	5 pt	5 位	0 sp
		緑という 色 をナマの色としてそのままとらえ、銀と対比しつつ、ラストで黒へ。 その色変化があざやかで、論理展開がきっちり 色 の印象として残るところが良さと読みました。 ラスト「肝に銘じる」というカタい（ 新聞風の ）言い方をすると、ちょっとエラそうかな。「なってしまうのではないだろうか」と問いかけでふわっと終わるくらいでどうでしょう？		
A10	ツワブキの花	24 pt	1 位	0 sp
		朝、昼、夜。朝、昼、夜。そのくりかえしがせつない。そうしたクレッシェンドの果てに「どちらも知っているだけだった」とラスト1行がずどん。くやしいけれど（くやしがることないか）おみごとです。当然の首位、というところでしょうか。おめでとう！ それにしてもツワブキ。地味な花だなあ。これ、バラとか百合とか、チューリップとかひまわりとか、すぐにパッと思い浮かぶものじゃ似合わないですよ。ぼうばくと、読者が好きなように想像できる地味な花がいい。 そんな花選びからして、もうプロ級です。冥王星がリストカットしてツワブキの花びらを散らしたあとは、さてどこへ？ イチオシフレーズ：「どちらも知っているだけだった」×5、「二度もお前を死なせたくないんだ」 おお、イチオシフレーズ大賞もゲットです。		
A11	木々の世間話	2 pt	8 位	3 sp
		につくきアブラムシめ！ おばさまの世間話風のおっとり加減が吉。その雰囲気良さが評価されて、3つの賞をいただきました。 せっかくの会話なので、おふたりの性格の違いが描き分けられると、もっとおもしろかったかも。 それにしても、タイトルを左下に小さく置くのがミョーに流行ってますね。誰のせいだ？ 特別賞：たぶん桜で賞/会話で賞（書こうと思ったらむずかしい）/メルヒェン賞（単純におもしろかった）		
A12	終わり	0 pt	10 位	0 sp
		緑の芽を見つめながらの描写で失われ行くものへの哀惜の思いは伝わってくるのですが、年齢設定があいまいなので、想像の姿がぼやけます。 仲間たちの名前や性格、小学校何年生なのか、季節はいつ？ と細かな条件を緻密に埋めてゆくと、よりくっきり悲しみの形が出たのでは。		

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	青 + 黄 = 緑	3 pt いいなあ、これ。一見、ささっと仕上げたように見えて深い。絵本にしたようなコンセプト。 視覚効果を狙ってレイアウトやフォントを工夫すると、よりよいのでは。それにしても、みなさま「萌」の1文字に反応しすぎですって。「本来の萌賞」までいただいて、最多特別賞の荣誉ゲットです。 特別賞：シンプル賞/萌えるで賞/10秒でよめるで賞/本来の萌賞 イチオシフレーズ：「萌え」	7 位	4 sp
B02	環境と問題と人間	0 pt 「私達はもっと環境問題を「私」の範囲に取り込んでゆくべきだと思う」というキーフレーズの主張が、ずっと立ってきます。主張のコアはきちりできているので、三題ばなし風の構成でないほうが、遠回り感がなくて良かったのでは。 それと、さいご2行が惜しい。「言葉遊び」とまとめてしまうと、せっかくのテンションが下がってしまいます。 冒頭とラストは、いちばんの勝負どころ。これ基本。コンセプトはきちりできているので、あとは構成力が課題かと。	12 位	0 sp
B03	緑の羽根	8 pt 小さな善意、その場限りで終わらないことがたいせつ、というメッセージが、緑の羽根という小物に託してきちり伝わってきます。 ムりにこしらえごとをしないのびやかさ。そして、これだけしか字数を使っていないのに、しっかりとユニークな考察まで届いているところが、ほぼ理想に近い仕上がりでした。	3 位	0 sp
B04	▲例えば...緑って??▼	6 pt まんなかのキリトリ線が謎ですが。 日常の光景の中でつらつら紡いだ小さな思索。理屈<感覚、と1行の主張にしてしまうとありきたりのものを桜やりんごで彩ったのが良さです。 特別賞：切りとり線で賞（メンバーの心をつかんだ） イチオシフレーズ：「りんごが落ちた。ただそれは地球が食べたかっただけだよ。。。」「抱きしめたいのは好きだから」ラスト1行のインパクトがヒットして、イチオシフレーズ大賞ゲットです。	6 位	1 sp
B05	緑	8 pt 子どもの名前がふたりのなれそめ。そんなほのぼのストーリーが好ましい。赤ちゃんを焦点に幸せ疑似体験をどうぞ。 ただ、なんでタイトルに「緑」なんていう、お題そのまんまなものを付けたのでしょうか。「みごりご」に一票。 特別賞：あと一歩だったで賞/盛りあがった賞（ノンフィクションじゃないよね!?と盛り上がった） イチオシフレーズ：「ソイツを。せばいいだけだ.....」×2 「ヒロ」	3 位	2 sp
B06	クレヨン	3 pt クレヨン、です。ひとつの色をひたすら塗り続けるひたむきなクレヨンです。そんなクレヨンの性格が語り口にそのまま乗っているところが何よりの魅力でした。「真白で、ビクビクしている画用紙」など、細部の表現も新鮮。 ときに、このクレヨン君は緑なのでしょうか。色ごとのキャラクター付けがちょっとあってもおもしろかったのでは。 特別賞：頑張ったけどよく分からなかったで賞	7 位	1 sp
B07	科学実験	33 pt 「地球は青かった」「人間は緑だった」。光合成人間登場です。 ふとした日常から人類初の偉業へ、そして.....起伏の多い展開なのに、ちっとも窮屈でないのは、科学者風のたんたんとした語り口も勝因かと思えます。予想通り、圧勝でした。おめでとう!! ときにカエル人間、しおれたあと、マニンゲンに戻れたのでしょうか？その後、が気になるところです。 特別賞：ナメック賞（ナメック星人（ピッコロ）を思い出したから）/失敗で賞 イチオシフレーズ：「実験は失敗におわった」	1 位	2 sp
B08	受け継がれるもの	17 pt 秘密基地。それだけでワクワクする響き。 ラストでふふっと笑って、くるとタイトルを振り向くと「受け継がれるもの」、ああそうか、きっと秘密基地で遊んだ子どもがおとなになって、その思いを受け継いでゆくんだな、と納得。 コラムランドもそうでありたいなあ、なんて。	2 位	0 sp
B09	五月病	2 pt	9 位	1 sp

		季節のうつろいに気持ちの変化を乗せてゆく構成が、読みやすく共感しやすいです。 こうやって言葉の形にすることで閉塞感が少しでもほぐれてゆくといいな、と思いつつ読みました。 その後——お茶会で、とっても陽気な作者さんに遭遇。「ぜ～んぶウソだよ～ん」だそう。 特別賞：焦ってるで賞 イチオシフレーズ：「焦りにを感じる」
B10	夏の思い出	1 pt 10 位 2 sp 白い蝶の儚さで消えた初恋。ていねいに組み立てられたこちよいストーリーです。 ちょっと淡すぎて、色の個性が欲しい気もするけれど、それは趣味の問題かも。 特別賞：妄想が激しすぎるde賞/恋愛小説をよみすぎで賞 イチオシフレーズ：「これが僕と彼女の出会いだった。」
B11	脱走	1 pt 10 位 0 sp うわスゴイ。看板まで読めちゃうインテリジェント・インコだ。 なんと言っても、「人間なんていなくなればいいのに…」というラストの眩きが、そうやって人間が作ってくれたねぐらに戻ってゆくくせに、という矛盾で笑わせて秀逸です。 イチオシフレーズ：「もう、人間なんていなくなればいいのに…」× 2
B12	コト	8 pt 3 位 2 sp 何だかちょっとタイクツだなあ風景ばかりで……とラストまで行くとタネアカシ。あ、そうかとさやさや爽やかな風が吹きます。 うん、コトノハは分かったけど、じゃあ、コトノミは何？ なんて聞いちゃうのはイヂワルなんじゃないか。 何はともあれ、3回目にして初のポイントゲットが、いきなり受賞トークの栄誉となったことをお慶び申し上げます。 特別賞：いやし賞（いやされました。）/ブービー賞